アメリカ文学翻訳事始め

―ロングフェローの訳詩と訳者たち―

鈴木　進

ヘンリー・W・ロングフェローの『ハイアワサの歌』三宅一郎訳が一九九三年四月に作品社より出版された。「本邦初の完訳」であるという。ロングフェローの物語長詩の翻訳としては、『哀詩エヴァンジェリン』（斎藤悦子訳、一九三〇年）以来六十余年ぶりではないだろうか。明治、大正期にはわが国でもあれほど盛んに読まれたロングフェローは、その後一気に評価が下がり、「今日では、彼を詩人の列に加へることすら詩を解せざることを告白するものの如く云はれる」風潮があると山宮允が書いたのは一九三一年のことであった。山宮はさらに続けて、詩人としては「今日吾々はLongfellowを必要としない」[1]とさえ述べている。

アメリカでは最近になってやっと、いわゆる「炉辺詩人」たちが考慮し直される動きもあるようだが[2]、日本で *The Song of Hiawatha* の翻訳が今、なぜ出たのであろうか。

一般的に文学作品の評価は文学思潮や社会の変化と密接な関わりがあるが、『ハイアワサの歌』の翻訳出版もまた、わが国において、かつてロングフェローが愛読されたのとは違った意味での需要に応えるためのものであろうと思われる。

そのことは同書の装丁を見ても明らかである。まず表紙がアメリカ先住民（インディアン）のフォークロア風のデザインでなされ、さらに巻末の解説には四百点を越える一五～一九世紀インディアン史料図版も載っている。そればかりでなく、別冊付録には「森林インディアン・オジブワ族の世界」（横須賀孝弘）、および「白い人『ハイアワサ』」（荒このみ）の解題がなされている。

このようなことからもわかるように、邦訳『ハイアワサの歌』の成立事情は、ロングフェローの詩、翻訳も然りながら、むしろ、物語の主人公ハイアワサ神話への人類学的視点、あるいはアメリカ先住民に対する文化多元主義的関心があってなされたことではないだろうか。(3)

そもそもロングフェローの名前が日本の英学生の間で知られたのは、幕末にアメリカより輸入された英語テキストの中の短い詩や長詩の抜粋の講読を通してであった。しかし彼の詩が文学作品として一般に愛読されるようになったきっかけは何と言っても一八八二年の『新体詩抄』にあったと言ってよいであろう。同詩集に訳載された「ロングフェロー氏人生の詩」（“A Psalm of Life”）、山仙士訳、「玉の緒の歌」（“A Psalm of Life”）巽軒居士訳、および「ロングフェロー氏児童の詩」（“Children”）尚今居士の三編はそれまでにない近代詩として、当時の読者に新鮮な驚きをもって迎えられた。

しかし日本人によるロングフェローの最初の訳詩というのであれば、『新体詩抄』よりもさらに十二年前の一八七〇（明治三）年中村敬宇訳「打鉄匠歌」（The Village Blacksmith）がある。中村の訳業は同時にわが国におけるアメリカ純文学作品最初の翻訳でもあった。ロングフェローの長詩では *The Courtship of Miles Standish* の散文訳、「マイルス・スタンヂッシュの恋」、山路愛山訳が最初である。

中村敬宇（正直）（一八三二―一八九一）の名は一般には『西国立志編』（Samuel Smiles, *Self-Help*; with Illustrations

of character, conduct, and perseverance）の訳者として知られている。彼は徳川幕府倒壊のため、留学先の英国から帰国するとすぐに静岡の地で *Self-Help* の翻訳に取り掛った。没落幕臣の窮状を見て、その悲境から彼らが立ち直る力の必要性を痛感したからであった。山路愛山（彌吉）（一八六五―一九一七）もまた静岡在住の逆境にある旧幕臣の子として、『西国立志編』を読み、「自助」を学び、独学自修で習得した英学により、前述の翻訳を『女学雑誌』に発表したのだった。幕府学問所御儒者であった者も、無禄旧幕臣の子も、静岡の地で敗者の運命を共にする中で、計らずもアメリカ文学の翻訳の先駆けとなったのだ。

ロングフェローの作品自体は感傷的、懐古趣味的として文学的価値評価が低いとされている。そのことは認めるとして、前述の二編の本邦初訳とその翻訳事情は、日本の歴史の一大転換期との関連において興味深い。筆者はこの両者の関係を問い直し、それによってわが国におけるアメリカ文学受容史研究に新たな視点が開けるようにと願っている。

敬宇は“The Village Blacksmith”のタイトルを「打鉄匠歌」と漢訳した。“blacksmith”を意味する「打鉄匠」という訳語は、中村が同時期に翻訳した『西国立志編』の十三（章）中の二箇所においてもこのことばが用いられている。同じくこの章には、他にも「木匠」「裁縫匠」などもあるので、「匠」の本来の大工道具という意味から、広く、工作する技術師として用いたものと思われる。

次にロングフェローの原詩と敬宇訳の第一連を掲げよう。(4)

Under a spreading chestnut-tree
The village smithy stands;
The smith, a mighty man is he,
With large and sinewy hands;
And the muscles of his brawny arms
Are strong as iron bands.

蔽芾栗樹如張翼
下有打鉄匠之宅
其人壮剛手腕大
鉄条隆起筋脉黒

これを見る限り、原文に忠実な訳といえよう。以下紙数の関係上、論じるに必要な原詩と訳文のみを掲げて検討してみよう。また敬宇訳はこのように漢文であるが、本稿では松岡香氏ご教示の訓読文によって比較をすることにする。

第二連は原詩と訳文の間に大きな違いが見られる。ロングフェローの詩は“His hair is crisp, and black, and long, / His face is like the tan;”を含めた六行であるのに、訳のほうは漢文四行であり、その中には省かれた右の二行の意味が見当らないのである。

His brow is wet with honest sweat,
He earns whate'er he can,
And looks the whole world in the face,
For he owes not any man.

正経の汗に額は常に湿ほひ
正経の利其の力に食む
平生は一文の銭を借りず
天下の人に対するに愧づる色なし

鍛冶屋の頑丈な体格については、すでに第一連に訳されているとはいうものの、実はここに訳出されなかった二行の内容と相挨って初めてこのところの「正経」の意味が生きてくる。つまり「健全なる精神」と逞しい容貌の両者を備えた伝統的西欧世界の理想像としての鍛冶屋こそが原作者の意図であったはずなのだ。また訳詩第四行の「人に対するに愧づる色なし」には「自分の見苦しさを人に対してはじる」というルース・ベネディクト的「恥の文化」が邦訳にはいみじくも出ているのではあるまいか。さらに「正経之利食其力」には中村のもうひとつの翻訳『西国立志編』の冒頭「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」と相似た思想を感じさせ、まさにこの一句ゆえに敬宇をしてこれら二篇の翻訳紹介に駆り立てた力に他ならないと思われるが、そのことは後に改めて触れることにしよう。

第三連の原詩と訳を比べてみよう。

Week in, week out, from morn till night,
You can hear his bellows blow;
You can hear him swing his heavy sledge,
With measured beat and slow,
Like sexton ringing the village bell,
When the evening sun is low.

朝に鉄を打つ声有り
天未だ白けざるに釘鐺す
夕に鉄を打つ声有り
遅く速く節拍に応ふ
日日月月年又年
槌を揮ひて撃ち槌を揮ひて撃つ

英詩のもつ韻律は漢文あるいは邦語に移植すべくもないが、この連において中村はその不可能ともいえる実験を試みていると思われる。訳詩第一行および第三行の語尾がともに「有打鉄声」とあるのは、単純な形の rhyme（脚韻）に近

いといえよう。また第五行「日日月月年又年」も一種のalliteration（頭韻）を思わせる。その訳にあたる箇所の原詩は“Week in, week out”である。ただし訳文に「週」の字が見られないのはなぜだろうか。考えられるのは、中村がこの詩を翻訳した一八七〇年当時のわが国には、日曜日に始まり、七日で一回りする「週」という観念がまだ一般には普及していなかったと思われる。なぜなら太陽暦の採用は七二年、官庁の日曜日全休の実施は七六年四月からである。ただしJ.C.ヘボン『和英語林集成』第三版（一八八六年）には“week”の訳語として、“Mawari, isshūkan”[5]と出ている。

しかし「週」という観念と日曜日を聖日とする理解なしには、後の第五連の「安息」本来の意味の理解も困難だったに違いない。なぜなら「安息の日」の前提があってこそ、第三連のテーマである「勤勉」の教えが生きてくるからである。儒教にも勤勉の教えはあったが、ロングフェローの詩作の背後にあるのはピューリタン的勤労倫理であり、その元を辿れば、おそらくは十七世紀ニュー・イングランド信仰の「業の契約」（Covenant of Work）にまで及ぶのかもしれない。時代が下ってアメリカ産業主義の時代においてさえ、あるいはそういう時代だからこそ一層、日々の勤めに誠実に励むアメリカ人の理想像としての鍛冶屋の姿が称えられたはずなのだ。原詩第一行“…, from morn till night／You can hear him swing his heavy sledge,”は朝から夕べに至るまで槌を打つ音がその家から響いてくる、これこそマックス・ヴェーバの「資本主義の精神」を連想させるものではないか。[6] 中村が英国での見聞からこのエートスをどれほど理解したのかはわからない。だが、新しい日本の建設に「勤勉」と「自立」がそれを支えるのに必要な精神的土台であるとして、「打鉄匠歌」の翻訳がなされたと推測しても強ち的外れといえまい。「釘鐺」とは本来「釘を打つ音」であるから、訳は鍛冶屋よりも大工に近いイメージではある。第四行より連終りまでの“With measured beat and slow,／Like sexton ringing the village bell,／When the evening sun is low.”はわが国でも、夕べに寺の鐘を撞く、あれによく似ている。にもかかわらず訳出されなかったのは詩の行数に縛られたためであろう。

第五連の前半は原詩に忠実な翻訳といえよう。しかし、後半二行には語学的にも訳者の解釈上も疑問が残る。「逐ひて之を捕ふるも寧ぞ呵責せん」に当たる原文は“And catch the burning sparks that fly／Like chaff from a threshing-floor.”である。この“catch”の主語は三行目の They (＝children) であって、その意味するところをパラフレイズするならば、“They love to catch the sight of the burning sparks／that fly...”である。原詩のどこにも訳文のような、鍛冶屋が学童たちを「責めて、怒ったりしない」という意味の言葉はないのである。さらに中村訳には“the burning sparks”の比喩に用いられている「脱穀場に舞い上がるもみがらのような」という表現もすっかり脱落している。訳者はこの「鍛冶屋」の仕事場が収穫に忙しい農夫たちが脱穀する、埃りっぽい畑の近くに位置するとは思っていないらしい。そのような田園調の風景が訳文からは伝わってこないのである。そういえば訳詩の題名が「打鉄匠歌」であり、「村」の鍛冶屋となっていないことと合わせ、中村は“The Village Blacksmith”の詩を田園詩 (idyll) とは理解しなかったのであろう。

第六連、原詩は前述の「勤勉」の裏付けとしての「信仰」がうたわれ“He goes on Sunday to the church,／And sits among his boys;／He hears the parson pray and preach,”である。それを「安息の日には店舗を鎖し、寺院に往きて講繹を聴く」とほぼ忠実に訳している。もちろん“parson pray and preach”の頭韻は訳文に移すべくもない。それに続く三行では

He hears his daughter's voice,
Singing in the village choir,
And it makes his heart rejoice.

其の女衆と偕に神詩を唱へ
之を聞く中に心は独り悦懌す

聖歌隊の中に、己の娘の歌声を聞き分け、それとよく似た声の持主、今はなき妻の面影が彷彿とする。ここにもまた、天国に憩う妻のもとへ行く日までは、現世における務めと信仰に励むピューリタン鍛冶屋の姿が見られる。次の“And with his hard, rough hand he wipes／A tear out of his eyes.”を中村の訳文は「追憶して涕涙の滴るを覚えず」と一行で済ませている。だがこれでは筋骨逞しい鍛冶屋が、荒くれた手をもって、人前で涙を拭うという、あの妙味が削がれてしまっている。さらにつけ加えるならば、原文のこの一句のゆえに日米においてロングフェローがあまりにもセンチメンタルであると評される所以である。

第八連は、妻を亡くした鍛冶屋が辛い人生も誠実に働きつつ、前向きに進んで行く、という趣旨を表わしており、ほぼ原文通り伝えている。第三行および第四行の“Each morning...”と“Each evening...”が「朝朝夕夕」と漢訳も対句になっていること以外に取り立てて述べることはなさそうである。

そして原詩最後の連のような表現があるゆえに、アメリカにおけるロングフェローの評価は十九世紀の熱狂的な称賛から、詩人の死後の酷評に至った決定的六行であった。他方わが国においては、この教訓的一連のゆえにロングフェローがかつては愛読されたのであった。原文訳文とも、鍛冶屋の生き方をわれわれのあるべき人生の師とし、運も思想も行いも、炎を上げる人生の炉と鉄床で鍛えあげるべきであるというのが大意である。

敬宇は『西国立志編』の翻訳の際に、スマイルズの原文にはない創作文を訳文に加え、読者に自主の精神を伝えようとした。同じことが「打鉄匠歌」という短い詩の翻訳においてもなされた。川本皓嗣氏によれば、それはこの詩の最終連の最後の二行、“Thus on its sounding anvil shaped／Each burning deed and thought.”の訳文「心思言行は火焔の裏、砧上に鍛練すれば模式を成さん」にあるという。氏は「成模式」は「世間あるいは後世の模範となるようなりっぱな人間になるだろうという。そういう発想は、原詩のどこにもない」と。同氏の指摘はさらに、ロングフェローの「炉

と鉄床は倫理的、宗教的な内省である」のに、中村の描く鍛冶屋は「世間の評判、名声、そしてそこからくる対世間的な誇りを得るためである」[7]との結論に至る。これもまた「恥の文化」対「罪の文化」なのであろうか。

それでは敬宇はなぜ原詩にない言葉を加えてまで“The Village Blacksmith”を翻訳したのであろうか。そのことを考える前に、中村とロングフェローの出会いはいつ、どこにおいてだったのか。中村敬宇が幕府留学生の次席取締役として英国に渡ったのは一八六六年十一月であった。当時、ロングフェローはヨーロッパでも人気が高く、その詩集はイギリスにも多く輸入されていた。ロングフェローがヴィクトリア女王の歓迎を受けたヨーロッパ旅行の前年に敬宇はすでに英国を去っているが、敬宇が英国でロングフェローの詩を手にしたのは十分考えられる。敬宇は恐らく彼がアメリカ詩人であるとの意識すら持たず、ロングフェローを愛読し、詩集を持ち帰り、静岡の地で *Self-Help* や *On Liberty* と同じ頃に翻訳に取り組んだのであろう。中村敬宇は徳川家と共に静岡に移住した幕臣たち、特に没落士族の子弟たちのため、新しい時代への精神的支柱を与えようと *Self-Help* を『西国立志編』と訳して出版したのはよく知られた事実である。同様にロングフェローの訳詩「打鉄匠歌」もまた「自ら労働に服することを潔しとしない」[8]で、かつての持権意識を棄てられず貧窮を余儀なくされている者たちに、勤勉に労働し、それによって自活をする鍛冶屋の生き方を伝えようとしたものであろう。一方、読者の側にもそれを受け入れる素地があった。彼らが教養として培ってきた儒教的「勤勉精神」に敬宇はロングフェローの原詩のもつピューリタン的「勤勉精神」を、それらは本質においては異なる種類であるが、接ぎ木したのであった。

ここに一人「『生産的の事業を耻ず』是れ総ての武士殊に徳川武士の病根なり」[9]と述べ、「自助の精神」を「打鉄匠歌」の訳者中村敬宇によって教えられた人物がいた。彼もまた没落した幕臣の子弟の身をもって、敬宇の『西国立志編』に教えられた山路愛山その人である。後に史論家として名をなした愛山も、若き日にロングフェローの翻訳に関わった者

として、わが国のアメリカ文学翻訳史に名を残すことになった。

『新体詩抄』にみるように、ロングフェローの初期の邦訳の大半は、教訓をテーマとする短編詩に限られていた。そのような中で一八九一年になって初めて、物語長編詩が愛山逸民（山路愛山）によって翻訳された。『女学雑誌』第二六一号（明治二四年六月十八日）から二七一号（六月二七日）に載った「マイルス・スタンヂッシュの恋」がそれである。

ロングフェローの原詩はdactylic hexameterであったが、愛山はそれを小説[10]として訳し、訳文に先立つ断り書きに謙遜して「原詩鈴の如し訳文鑼の如し」と記している。散文訳ではあるが、本邦初訳がどのようなものであったか、引用の煩しさを承知の上で参考に供しよう。

昔し歐洲諸邦の民が亞米利加ゑ植民せし頃、清教徒の移住せしプリマウスといへる土地ゑ在りし簡樸なる一家の室内を右往左往ゑ軍人らしき歩様ゑて歩みつゝありし清教徒の尉官マイルス、スタンヂッシュといへる者あり、身ゑは「ダブレット」胴衣と「ホース」股衣とを着け、コルトホン製の革皮ゑて造りたる長靴を穿てり。

物語の背景を知らぬ読者のためであろうか、原文にはない「欧州諸邦の民が亜米利加に」といった補足説明句が加えられたのが目につく。他には固有名詞の発音表記[11]に問題があることを除けばさしたる誤訳も見当たらない。

『女学雑誌』は厳本善治を主宰に、キリスト教を基盤とし、女性啓蒙活動や女子教育を強調する総合誌であった。愛山は同誌に「恋愛の哲学」などの記事を書き、それが厳本の目にとまって、ロングフェローの恋愛詩の翻訳の依頼を受けたのであろう。

明治中期のわが国では考えられなかった、あの名高きプリシラのことば、“Why don't you speak for yourself, John?”

の訳はどのようであったか。愛山は「ジョン何故に御身は御身の為めに語り給はぬにや」と訳している。この時期愛山は静岡県見附袋井地区の代用牧師をしており、「独学ながら、字引を師として」短時間にこれを訳出したものと思われる。連載は第一回「マイルス・スタンヂッシュ」に続き、第二回「恋及友誼」（二六二号）、第三回「意中人の使命(上)」（二六三号）、第三回「意中人の使命(下)」（二六四号）、第四回「ジョン・アルデン(上)」（二六五号）、第四回「ジョン・アルデン(下)」（二六六号）、第五回(上)「五月花の出帆」（二六七号）、第五回(下)（二六八号）、第五回の下の末段右の一節（二六九号）、第六回「プリスキラ(上)（二七〇号）、そして第六回(下)「マイルス・スタンヂッシュの患」（二七一号）までで中断されている。原詩 *The Courtship of Miles Standish* 全体は一千十七行の長さがあるが、愛山はそのほぼ七割ほどを訳出しているのに完訳に至らなかったのはなぜだろうか。

その事情を記す資料に筆者は出会うことができなかった。『女学雑誌』（第二六九号）は、ただ「愛山生に止みがたき事あれば也」と記すだけで、確たる理由はわからない。しかし彼の年譜を辿ってみると、この年の七月にメソジスト教会の週刊新聞『護教』が発刊され、愛山はその実質的主筆として迎えられたことがわかる。恐らくはそのために翻訳の時間が確保できなくなったためではないだろうか。

それでは愛山は *The Courtship of Miles Standish* という詩のどのような面に関心を持って翻訳したのであろう。愛山は「詩」とは「歴史的事件を歌うべき」という考えを持っていた。[12] そのような観点からいえばロングフェローのこの詩がアメリカ最初の植民の歴史に取材した作品であることが愛山の興味を誘った理由の一部であるのかもしれない。さらに想像を逞ましくするなら物語の巡礼父祖（Pilgrim Fathers）たちの運命に、江戸を後に静岡の地に来住した人々の呼称「おとまりさん」[13]としての自分と相通ずるものを読み取ったこともあるかもしれない。彼ら両者にとってプリマスや静岡は決して安住の地でなかったのだから。

幕府崩壊に伴い、徳川家の静岡に無禄移住した旧幕臣の子弟たちには藩閥も学閥もなく、彼らに必要なのはただ「天ハ自ラ助クル者ヲ助ク」の自立の精神のみであった。中村敬宇は英国十九世紀中葉資本主義を実地に見てそれを支えるのが、ピューリタン的勤勉、節約、忍耐であると知った。没落士族が懸命に働くことは日本が西洋型資本主義に向かう中で経済的、社会的報酬に繋がる道であることを敬宇は前述の翻訳によって伝えようとしたのであろう。

敬宇の翻訳の読者であった愛山の出身も境遇も「自ラ助クル者」でなければならなかった。彼はキリスト教の教会で僅かな英語の手解き受けただけで、あとは専ら独学自修によりロングフェローの *The Courtship of Miles Standish* の本邦初訳（未完）の栄に浴したのであった。

ロングフェローの短長それぞれの詩の本邦初訳およびその訳者たちが置かれた立場の歴史的意義と翻訳史との関係をさらに問い続けることによって筆者はわが国のアメリカ文学受容研究に新たな局面を見い出したいと願っている。

注

(1) Makoto Sangu, with Introduction and Notes, *AMERICAN POETS* (Kenkyusha, 1931), Introduction xxxviii

(2) エモリー・エリオット編『コロンビア米文学史』山口書店、一九九六年、三四頁。

(3) 同訳書出版の前年、一九九二年は国際先住民年であった。

(4) 敬宇漢訳は木村毅『日米文学交流史の研究』恒文社、一九八二年、二六〇—二六二頁。ロングフェローの原文は George Monteiro, ed., *The Poetical Works of Longfellow* (Houghton Mifflin Company Boston, 1975), pp.14-15 による。

(5) J.C.ヘボン『和英語林集成』講談社、一九九四年、九五八頁。同辞書 第二版(一八七二年)では WEEK, "Mawari, isshū" となっている。

(6) 「朝の五時か夜の八時に君の槌音が債権者の耳に聞こえるなら、彼はあと六ヵ月は延ばしてくれるだろう」。マックス・ヴェーバ、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、一九八八年、二八頁。

（7）川本皓嗣「『村の鍛冶屋』の生きがい」、東京大学公開講座59『アメリカと日本』東京大学出版会、一九九四年。
（8）坂本多加雄『山路愛山』吉川弘文館、昭和六三年、二二頁。
（9）注（8）に同じ、二二頁。
（10）『女学雑誌』（第二六一号、明治二四年六月十八日）、十三頁。なお韻文訳は一九一一年『将軍の恋』と題して、牧田勝によってなされた。
（11）ロングフェローの原文は、注（4）のホートン・ミフリン版を参照し、比較した。
（12）前出の『山路愛山』、一一四頁。
（13）注（8）に同じ、七頁「当時、このようにして江戸から静岡に来住した人々を土地の人は「旅客」を意味する「おとまりさん」ということばで呼んだ」。

参考文献

サミュエル・スマイルズ、中村正直訳『西国立志編』講談社、昭和六二年。
佐渡谷重信『日本近代文学の成立』明治書院、昭和五二年。
Higginson, Thomas. Wentworh. *HENRY WADWORTH LONGFELLOW*: Houghton Mifflin Company, 1902.
Robertson, Eric S. *LIFE of HENRY WADWORTH LONGFELLOW*: Kennikat Press, 1972.
Yoshitake, Michio. with Introduction and Notes, *THE COURTSHIP OF MILES STANDISH*, Taiyosha, 1977.
Wagenknecht, Edward. *HENRY WADWORTH LONGFELLOW*: Ungar, 1986.